

In Retrospect of the Last Ten Years of the Otsuma English Association

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田口, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6488

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



大妻英文学会の過去 10 年を振り返る

田 口 孝 夫

「10年ひと昔」という。本学会の機関誌『大妻レビュー』は今年の7月にちょうど創刊50周年を迎える。「ひと昔」前の創刊40周年記念号には田中英史先生（現本学名誉教授）が「大妻英文学会の40年」という記事を寄せられた。今回はそれ以降の10年間の本学会の歩みをたどりたい。

本学会は『英語年鑑』（研究社刊）の「研究団体一覧」にも掲載されているれっきとした研究機関であり、本誌も長年、学会誌として英語英文学および英語教育学の研究に寄与してきた。本学会の特徴は、なんと言っても教員・大学院生・学部生・短大生という多様な年齢層の方々によって構成されているという点であろう。本誌50周年記念号にも50歳もの年齢差のある方たちがそれぞれ研究成果を寄せられるはずである。

そうした学会の運営にとって構成員の減少は大きな痛手になっている。原因は短大の縮小と新学部増設という学院の方針にある。短大英文科の定員は平成15年度までは220名であったが、16年度以降150名となり、25年度には100名、さらに27年度には40名と減少の一途をたどっている。このことはすなわち学会費収入の減少を意味している。かつて行われたシェイクスピア劇の鑑賞会や著名人を招いての講演会などは、現在、経済的に実施不可能という状況である。それでも、かろうじて本誌や『ニューズレター』の発行、また英文学会主催の各種催しが滞りなく継続できているのは、ひとえに学会関係者の努力の賜物なのである。

学部英文学科関連で特筆すべきことは、平成26年度末をもって狭山台校が閉校となったことである。本学会では今から10年前の平成18年12月以降、毎年、学部1年次生を対象にレジテーション・コンテスト（通称レシコン）を主催してきた。第1回目の会場は狭山台校舎154室であった。英文学科では1年次生の千代田移転に伴って、このレシコンをどう運営すべきか（4年次生にまで拡大すべきか、ディベート部門やドラマ部門も加えるべきか等）について議論を重ねたが、けっきょく従来の形のまま千代田校舎で開催する

ことになった。昨年のレシコンはちょうど10回目の記念すべきコンテストであった。

大学院関連でも大きな変化があった。文学部を基礎として、大学院文学研究科英文学専攻修士課程が設置されたのは、昭和47年。その後、平成7年に博士後期課程が設置されるなど、順調な歩みをつづけたが、平成22年、人間文化研究科として改組されることとなり、英文学専攻は現在の言語文化学専攻英語文学・英語教育専修に姿を変えた。この改組による影響は小さくなかった。かつて英文院生室は英文系のフロアにあった。教員は廊下等で院生と顔を合わせる機会も多く、院生室で授業を行うこともできた。しかし、英文院生室は改組によって本館移転の際に別フロアの研究科院生室に吸収された。院生と英文系教員との距離が遠くなったと言っている。本学会は英々専修の院生研究発表会やコロキウム等を通して教員と院生との交流の機会をサポートしているが、とても十分とは言えない。今後、本学会の運営や『ニューズレター』の編集等に院生の協力を求めるなど、院生の活用も検討されているのかもしれない。

『大妻レビュー』には、毎号、巻末に本学会の特別会員である専任教員の一覧表が掲載される。ちなみに第41号の一覧表に名を連ねている先生方は、学部13名、短大英文9名である。その後、この10年間のあいだに多くの先生方が大妻を去られた。学部英文学科では、栗原裕、小林史子、坂口明德、田中英史、兵頭晴子、山名章二、ロナルド・ソントンの計7名の先生方である。さらに今年3月に退職された河野武先生がこれに加わると、現在も在籍している学部英文スタッフは、なんと、小生を含めてわずか5名のみということになる。退職理由の多くは定年によるものである。その後、補充人事は順調に行われ、現在、専任13名という教員数が保持できているのはめでたいというべきかもしれない。

一方、短大英文の専任教員数は9名だったが、短大縮小の影響で現在は4名に減っている。春原正彦、豊田暁、中野節子の3先生は定年あるいは定年直前でご退職、また、米塚真治先生と守田美子先生は他学部や他学科に移籍となった。その他、この10年のあいだに着任されて短期間でお辞めになった先生方もおられる。小久保潤子先生と窪田憲子先生である。悲しむべきは、昨年、ゴードン・リヴァシッジ先生が半年間の休職後、急逝されたことである。少ない専任数で多くの業務をこなさなければならないことがストレスと

なったのだろうか。先生は本学会においてもフィルム・メディア・クラブで学生の課外活動の指導に当たっておられた。英文系で在職中に逝去された先生は平成 5 年の辻次次郎先生以来である。この 10 年のあいだに多くの先生方が英文研究室を去り、また、多くの先生方に仲間に加わっていただいた。10 年間の時の流れを実感するのは、こうした先生方との出会いと別れに思いを馳せるときである。

本誌『大妻レビュー』は昭和 44 年 3 月に第 1 号が刊行されている。その時にはまだ本学会の紋章はなかった。それが本誌の表紙を飾るようになったのは第 3 号からである。紋章学では盾を持つ者から見て右上から左下へと引かれる線をベンド・シニスター (bend sinister) という。これは庶出を表わすという説もあるが根拠はない。本学会の紋章は黒字の盾とベンド・シニスターの白線をベースとして、白線部に OTSUMA の文字が黒字で刻まれ、分割された右上に English の頭文字 E、左下に association の頭文字 A が白抜きで配されたものである。これを考案したのは築地小劇場に所縁のある演劇評論家、中川龍一先生である。先生はオックスフォード大学やケンブリッジ大学のコレッジ・シールドに倣ったのかもしれない。前述の田中先生の記事によれば、新入生には毎年、これをデザインしたバッジが配布されたそうである。

小生が本学に着任したのは昭和 49 年で、その時、たしかにこのバッジを手にした記憶がある。1.5 センチ程度の小さなもので、ピン止めがついていたと記憶する。その後、バッジ配布は行われなくなったが、この紋章は当時発行されていた本学会の英字新聞 *The Apple* 1 面のヘッド中央にも置かれていた。この紋章は学生や教員の本学会に対する帰属意識を高める役割を果たしていたにちがいない。英文学科では、現在、“Your wish with English” というフレーズを学科のモットーとし、これをデザイン化したアイコンを作成するべく検討を重ねている。今後、そのアイコンがどのように利用されるのか、具体的なことは何も決まっていないが、古くから在籍している者として、このアイコンが伝統ある本学会の紋章を駆逐することがないようにと、切に願うものである。